

式辞

本日、ここに、東京都立野津田高等学校第四十八回卒業証書授与式を催しましたところ、お忙しいなかにも関わらず、多数の来賓の方々のご臨席と保護者の皆様のご列席をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

ただいま、卒業証書を手にした、普通科84名、福祉科17名、体育科16名、合計117名の皆さん、卒業おめでとう。今、皆さんの胸の中には、三年間の高校生活が無事に終了したという安堵感と、青春の一ページである高校生活が終わってしまったという寂しさが混在していると思います。皆さんが、今日の日を迎えることができたのは、皆さん自身の努力が実ったからですが、それを支えた保護者の皆様、友人、指導に当たった先生方という周囲の励ましがあったからではないでしょうか。どうか、その方々に対する感謝の気持ちを忘れないでください。

いま振り返ると、中学時代にコロナ禍を経験した皆さんは、不安を抱きながらの高校入学だったと思います。その不安も少しずつ減少し、年々活動の幅も広がり、学校全体に活気を取り戻してきました。今年開催された文化祭、創立五十周年記念式典における皆さんの活躍は、深く印象に残っています。最高学年としての自覚を持ち、楽しみながらリーダーシップを発揮し、学校全体を大いに盛りあげてくれました。皆さんのパフォーマンスや笑顔を見たとき、安堵の思いでいっぱいになりました。そこで、卒業生の皆さんの「人生の門出」に際して、一言、述べさせていただきます。

皆さんの中に「ブルーピリオド」という漫画を読んだ人はいますか。色々と考えさせる漫画だと私は感じました。主人公が好きな絵に打ち込む姿が描かれ、壁にぶつかっても挑み続ける姿は、共感しつつも難しいけど当たり前だと思いませんか。好きだからこそ誰に言われなくても打ち込めることを皆さんは知っているはずです。

私は学生の頃に、毛先の長い筆に漆をつけて、細く長い線を引くだけの漆塗りの実習を経験しました。お手本を見せる先生は、いとも簡単に細く長いきれいな線を引きます。私たち生徒は、誰一人として引ききることができません。とぎれとぎれの短い線を繋ぎながら、長さ四十センチの一本の線を引くのがやっとでした。難しく単純な作業は、面白くありません。ただ私も他の生徒も悔しくてか、きれいで途切れていない線を引きたくてか、授業中ずっと線を引き続けていました。そんな中、2時間続いた授業の最後に言った先生の一言。「そんなに簡単にはできないよ」は、生徒に現実を理解させ、高みを目指す向上心を植えつけました。

フランスの詩人ルイ・アラゴンは「教育とは夢を語ること。学ぶとは真実を胸に刻むこと。」と言いました。教師は教育で生徒に希望を与え、困難な状況でも前向きに捉える姿勢を見せます。生徒は学ぶことを誠実に実践し続けることにより、より深い学びが得られます。ブルーピリオドの好きな絵を追求し続ける主人公に、美術教師が投げかけた「好きなことをする努力家はね、最強なんですよ！」という場面があります。教師と生徒が互いに向き合い、誠実に取り組んだ魅力的な励ましの一言です。皆さんの中にも野津田で経験を積み重ね、自分の進むべき将来を切り拓いていこうと決意した人もいるでしょう。まだ将来が見えていない人も必ず見えてきます。覚えておいてください。ポイントは「誠実に取り組む」ことです。

これからの社会は、急速な変化と多様化が進んでいきます。その中で、皆さんは想定外の課題に直面します。複雑な課題に立ち向かうためには、皆さん一人一人が持つ「課題解決能力」が極めて重要です。難しいことはありません。高校生活の中で培ったグループ学習や学校行事、部活動を通じて経験した「意見の対立や困難の乗り越え方」のことです。高校生活で得た課題解決能力と友人と「共に喜び、共に泣いた」経験は、色あせることのない人生最大の宝物を皆さんは手にしています。そして、本校の教育目標の「未見の私の発見」を忘れずに、新たな自分を発見し、将来に向かって、課題に挑む勇気を持ち、誠実に行動を続けて、これからの社会を生き抜いてください。

最後に、卒業生の皆さんを支えてくださった保護者の皆様、教職員の皆様。皆さんの寄り添いと叱咤激励があったからこそ、卒業生たちは今日を迎えることができました。深く感謝申し上げます。では、卒業生のみなさんの将来が輝かしいものとなることを祈念し、卒業式の式辞とさせていただきます。

令和7年3月7日

東京都立野津田高等学校長 高柳 勝彦